

情報通信媒体比較論—これからの真実を担うメディアの未来—

○氏名 森田 英夫 Morita Hideo

Keywords : 情報通信媒体、紙媒体、電気電波媒体、インターネット、情報法、真実の基準

1 目的

本研究の目的は“正しい情報・真実”すなわち“社会の維持に必要な情報”を如何に求めることができるか、それにはまず社会に流通する情報源の提供主体である情報媒体（メディア）としての、紙媒体、電気電波媒体、インターネット（SMS）、のそれぞれの特徴を把握して“正しい情報・真実”の本質に迫る必要がある。ある一つの事実の見方は多面的であって各個人によって様々であるが、それでも有史以来様々な“真実の基準”が使われてきた。各政府行政機関・あるいはその上位の組織（地域又は国際機関）の情報にはそのような基準がベースとして使われてきた。

2 方法：本研究の調査・分析方法はこれまで2000年頃から発表されてきた文献を基に考察を進める。A 紙ベースの新聞・書籍・雑誌・他パンフレットちらし、B 電波電気通信・ラジオテレビ、C インターネット（SNS）の各区分の全体をメディアと捉える。

人間社会の維持発展にとって、時代毎のそれぞれの特徴的な A,B,C の役割りとその動向と将来形を考える。人間社会の諸活動の分野を

(a)GDP 等で現わされる経済力即ち生産流通販売に通じる活動（含む生産消費活動/NPO 活動）

(b)文化（芸術音楽スポーツ）的な活動

(c)人間の生物的な福祉厚生（生活環境寿命）や人口動態に関わる活動や幸福感

(d)人間の存在する空間（村落都市から海洋宇宙）拡大に関わる活動、と4分野に分けて考察する。

メディアにおけるメインプレーヤは「情報」である。文献⁽¹⁾ 真実の基準として6つを考える。

ここで「真実の基準」を見るとトフラー夫妻^{文献⁽²⁾}は六つの基準を挙げている。・常識・一貫性・権威・啓示・時の試練・自然科学、このうち**唯一厳密な検証**に基づいており新しい状況に応じて修正可能なのは**自然科学である**。自然科学は世界共通の真実の基準でもある。

3 結果： 調査・分析の結果；(a)についてはAが19世紀後半までメディアの中心であり、20世紀に入ってBが登場しこれが現在のメディアの中心となっている。ここ10~20年にCが登場し今後の(a)のDX的GDP的發展拡大の主役とされそのメディアのメインプレーヤーが情報である。

(b)についてはAが19世紀後半までメディアの中心であり、20世紀に入ってBが登場し現在のメディアの中心である。ここ10~20年でCは特徴的なメディアとしてアニメなどリアルタイム動画的表現の分野を開拓しつつある。(c)についてはAが19世紀後半までメディアの中心であり、20世紀に入ってBが登場しAと並んで福祉厚生に役立っており、Cは福祉厚生の維持発展のスピードを上げるのに貢献している。(d)についてはAが19世紀後半までメディアの中心であり、20世紀に入ってBが登場し多少の村落都市の拡大に貢献があり、21世紀登場のCにより人工衛星経由のメディア機能が人間の居住空間の拡大を引っ張って行くことが予想される。

4 結論：以上により、情報通信メディアで過去に蓄積された「情報」は膨大でありその主役はAであって、20世紀になって準主役としてのBが登場したのであるが、21世紀の今後の主役には、例えばデジタル(D)X化で過去の「情報」を広く取り込めるようなMMI(Man Mchine Interface)技術の発展やDX化の為の資本投入があればCが主役となる時代も今後数十年で実現するかもしれない。【主要参考文献】

(1) 林紘一郎「情報法のリーガルマインド」勁草書房 2017.2.20

(2) A.Toffler, H.Toffler「富の未来」(株)講談社 2006.6.7 上巻 pp234-239